Vol.780 （月刊）毎月１日発行 Kenko Shinbun 2021年（令和３年）11月１日 無料

新健康協会では、新しい健康法を伝える「健康新聞」を毎月発行し、人間のもつ治癒力や適応力をお伝えしています。肉体的、精神的なコトでお悩みの方も是非一読されてみてください。

健康新聞

発行所
発行人 新健康協会
〒813-0001
福岡市東区唐原６丁目７番１号
TEL:092-661-1531
https://shinkenko.jp

次の御論文は明主様が、昭和二十五年に発表されたものであります。
世界平和と心身共に健全な人間作りを目指す活動に御理解を頂ければ幸甚です。

直観の哲学

私は若い頃、当時もてはやされたフランスの哲学者、故アンリ・ベルグソン氏の学説に共鳴した事がある。その説たるや、今も尚思い出す事がよくあると共に、信仰上からいっても稗益するところ大なるものがあるから、ここに書いてみるのである。

氏の哲学のうち、その根幹をなしているものは万物流転、直観の説、刹那の吾の三つであろう。特に私の感銘を深くしたものは直観の哲学で、氏の説によると、こうである。

人間は物を見る場合、物そのものをいささかの狂いなく見る事は容易ではない。物の実体の把握は誠に困難である。これは何故であるかという事である。

元来、人間は誰しも教育、伝統、慣習等種々の観念が総合的に一つの棒のようになって潜在しているものであるが、それに気づく事はほとんどない。これがため物をみる場合その棒が邪魔をする。例えば新宗教をみる場合でも、新宗教はみんな迷信邪教でありインチキであると決めてかかる事で、全く棒が妨害するのである。今日の社会人は、絶えず新聞雑誌から眼を通じて新聞人の意見が入ってくる。ラジオや人の噂からも耳を通して入ってくるという訳で、ますます棒が太く固く出来上がってくる。医者で治らない病気が信仰で治った奇跡をみても、そのままを素直に受け入れる事が出来ない。まず真先に疑惑を起こすのであるが、これが棒のためである。病気は医学で治るという観念が棒の中心をなしているからで、もし治ったとしたら、それは治る時節が来たからだというように、棒が種々の理屈をつけ、事実を彎曲してしまうという事は、我々の常に経験するところである。

このように、人間の陥りやすい過誤を訂正するのが直観の哲学である。即ち物を見る場合、棒に禍いせられない、虚心坦懐白紙の吾となるのである。それにはどうすればよいかというと、刹那の吾となるのである。即ち、物を見た一瞬直感した印象こそ、物そのものの実体を把握して誤りがない。従って確かに難病が治った事実をこの眼で見たなら、そのまま信ずべきで、それが正しい見方である。然るに、そんなはずはない、器械や薬で治らないものが、眼に見えない空に等しいものなどで治る訳がないと思うのは、最早棒が邪魔しているからである。そこへ誰かが「それは迷信だ、そんな馬鹿な話があるものか」というのは、他人の棒が邪魔の協力者となったのであるから、この点大いに警戒しなければならないのである。以上が直観の哲学のホンの概念である。

次に万物流転とは、一切は一瞬の間もなく流転しているという。例えば、昨日の吾と今日の吾とは必ずどこか違っている。いな五分前の吾と今の吾とも違っている。昨日の世界も、今日のそれとは同一ではない。社会も文化も国際関係も勿論そうである。従って人間の見方も、変化そのものに対してもハッキリ見なければならない。それが正しい見方である。この理によって、宗教も文化もその見方や考え方を変えるべきであるにかかわらず、何百何千年前の宗教の見方を通して、新宗教を批判するのであるから、正確な認識を得られるはずのないのは当然である。これが万物流転の説である。

浄霊体験記
● 「ベーチェット病」から救われた奇跡
● 浄霊に出会い一変 家族みんな救われる

浄霊によって真の健康体となり、運命が向上し、幸せになられた方々の体験でございます。

「ベーチェット病」から救われた奇跡

高槻支部
先田博文（48）

今年五月で新健康協会に入会して二十五年が経ちました。数々の浄化（病気）になりましたが、その都度浄霊をいただくことによって、明主様の御守護の中で乗り越えさせていただきました。

私は現在、音楽関係に携わる傍ら、接客関係の職場で働いています。ここでは食べ物も扱っている為、手のアルコール消毒をしなければいけない場面があります。薬の副作用の恐さを重々分かっている私としてはしたくない行為ですが、職場の規定として守らないわけにはいきません。

コロナ禍以前、アルコール消毒液の副作用としては手が浮腫む程度でしたが、コロナ禍以後はアルコール消毒液に触れる場面が以前の倍以上になり、手の浮腫み程度では済まなくなりました。

体のあちこちに湿疹が出るようになり、かなりの痒みの為に、夜はなかなか寝付けないことがありました。その上、昨年十月頃から今年四月頃まで、冬の寒さも手伝ってか、手荒れがとても酷くて辛かったです。元々体内にあった毒素や入会する前に入れた薬毒も影響したのか、なかなか症状が治まりませんでしたが、浄霊をいただいているおかげで大分楽になりました。

また、今年三月下旬頃から、左足薬指の皮膚が急にめくれ始め、日に日に他の足指もめくれていきました。皮膚がめくれた部分から透明の汁が出て、四月二週目くらいにはネバネバとした汁に変化しました。そして、四月三週目頃には左足の指全部と左足裏の上半分の皮膚がめくれ、黄色くてとても臭い汁が多量に出るようになり、左足の甲も腫れ上がり靴がまともに履けない状態になりました。

「重い毒は下の方へ下がり、ごく重いのは足の裏近くに集まる」という、明主様の御教えをいただいていたので、きっとこれだと思い、何も心配することなく、よく浄霊をいただきました。すると五月に入って二週目頃には足の甲の腫れも治まり、その後多量に出ていた汁も出なくなり、気がついたら新しい皮膚も出来ていて順調に元に戻りました。

約一ヵ月半の間に足から大量の毒素を出すことが出来、おかげ様で体内の毒素が減った分だけは湿疹の浄化も楽になりました。

今回の経験で、より一層明主様の御守護を感じ、感謝で一杯です。

次に私が新健康協会に御縁をいただいたきっかけをお伝えします。

そのきっかけは「ベーチェット病」という国が指定している難病にかかったことでした。

浄霊に出会い　変化が…

発症したのは、高校を卒業し岡山の音楽大学に入学して、一人暮らしにようやく慣れた頃でした。この病気は人によって症状が違うのですが、私の症状は、まともな皮膚がどこにあるのか分からない程、顔全体に吹き出物（毛嚢炎様皮疹）が出来、絶えず三十七度前半の微熱が続き、胸部や足の付け根等の関節痛、外陰部の小潰瘍、顔に出ている吹き出物が胸部へも出て、といったものでした。この病気は原因が不明とされていて、病状が進行すると葡萄膜炎になり失明する恐れがある、と医師から告げられました。

治療としては確立されていない為、症状に効くだろうと思われる薬を何種類か処方され、定期検診の時に病状が良くないことを伝えると、その度に薬の内容が変わりました。ようやく症状に合う薬に巡り合えたのか、ベーチェット病の症状が緩和されるようになりましたが、服用を怠るとすぐに元の辛い状態に戻ってしまうので、もう薬を手放せなくなっていました。

ベーチェット病と診断されてから約二年、二十歳で薬を手放せない毎日を送り、通学と生活の為にバイトはしていましたが、常に体調のことばかり気にしなくてはならず、この先どうなっていくのだろうと不安で一杯でした。

そんな時に、大学で師事していたピアノの先生（前田多津子さん＝会員）が「浄霊をいただいてみませんか？」とお声をかけて下さいました。先生にはベーチェット病と診断される前に一度、浄霊にお誘いいただいたことがありましたが、その時は家族の反対でお断りしました。しかし、その時とは状況も変わり、これでもし治るのだとしたら、との思いで試してみることにしました。

初めて浄霊をいただいた時は特に何も感じませんでしたが、病気が良くなってほしいの一心で定期的に浄霊をいただくことに決めました。

浄霊をいただきながら、今まで知らなかった薬毒の恐ろしさや、病気は体を綺麗にする為の浄化作用であること等、色んなことを教えていただきました。最初は薬を手放せませんでしたが、もし教わったことが本当に良いことであれば試してみるべきだと、意を決して、忘れもしない平成六年八月一日に、今日一日だけは薬の服用を止めてみよう、と試してみました。

奇跡！薬が手放せた！

すると一日経ってもつらくならなかったので、次の日も止めてみよう、次の日も、次の日も。そして薬を服用しなくてもやっていける自信がつき、とうとう薬を手放すことが出来ました！これは浄霊による力に違いないと感激し、二年もの間薬を飲み続けていた毎日から解放され、嬉しくてたまりませんでした。その上、浄霊をいただき始めて三ヵ月くらい経った頃に、病院での定期検診で変化が起こりました。

検診では毎回血沈検査が行われ、いつも異常値が出ていたのが、この時を境に異常値が出なくなったのです。私はますます浄霊の力に確信を持ちました。

それからというもの、毒素排除の色々な浄化をいただき、その都度浄霊で元気になりました。そしてベーチェット病の症状も段々と消えていきました。

今では文面の最初にお話しました浄化等をいただきながらも、「昔、難病にかかり苦しんでいた時期もあったのですよ」と人にお話しても、信じてもらえない程の健康をいただいています。

かつて私が難病で苦しんでいたように、色んな病気で苦しんでいる方が一日も早く新健康協会に御縁をいただけるよう願ってやみません。また、直接体験をお話する機会に巡り合えた時には、しっかりとお伝えさせていただきたいです。

明主様、誠にありがとうございました。

（兵庫県神戸市）

浄化作用ってどういうこと？

人間には体内の毒素を排除して健康を促進しようとする働きがあります。例えば、カゼの場合、蓄積してきた不純物や体外から入ってきた毒素を浄化するために熱や痛みが出ます。そして、その結果ハナやタンなどが出て体の中が掃除され、霊・体共に清浄化されます。

その毒素排除の過程を浄化作用と言います。

ですから浄化作用は、体の不調和を調和させる大切な清掃作用でもあるのです。

浄霊に出会い一変 家族みんな救われる

田川支部
岡本吉弘（53）

私が初めて浄霊をいただいたのは小学校二年生で、母が佐賀支部に連れて行ってくれた時でした。元々母は小児ゼンソクで体が弱く、就職してからも毎日アリナミンなどの栄養剤を服用してようやく仕事が出来るような状態でした。結婚後も何かあればすぐ薬に頼っていましたが、ある時流産をして、その後に不眠症になったので神経科から薬をもらって飲み続けたところ、数週間後に薬の副作用で急性肝炎になり、一ヵ月半程入院しました。そのうち母は食欲が衰え、何事に対しても気力がなくなってしまい、ついには医者からノイローゼの診断を受け、「あなたはもう精神病院行きですよ」と言われ、自殺をも考えるほどのひどい状態で苦しんでおりました。顔は青白く、体は痩せ細り、いつも泣いて暮らしていましたので、当然家の雰囲気は暗く、私はその母の姿を見ながら育ちました。

ところがある日を境として急に母が元気になり、笑顔が出てきたので嬉しく、不思議に思っていましたら、母が「薬に頼らない、とても素晴らしい健康法を見つけたよ！」と私に話してくれました。それが浄霊でした。

ノイローゼ、不眠症から解放！

同じアパートに住む人が、母の苦しむ状況を見かねて、知り合いの新健康協会の会員の方を母に紹介してくださいました。昭和五十一年四月、その会員の方が母を支部へ連れて行ってくださり、浄霊をいただくようになった母は、二日間の浄霊で長期間の不眠症から解放され、それからは見違えるように明るく、元気になりました。更にその二年後には、何度も流産を繰り返して諦めていた子供を約九年振りに妊娠、無事に出産し、私に妹が出来まして、母は嬉し涙をこぼしておりました。このようにおかげをいただいて、生き生きとなった母の姿は、子供である私にとっても大きな喜びだったことを今でもはっきりと覚えています。

母が浄霊をいただきはじめた頃、私も病弱で母と共に薬を多用する状態でしたので、母は早速私にも浄霊をいただかせたいと思い、一緒に支部へ通うようになりました。すると不思議なことに、私もだんだんと薬に頼らなくても済むようになって、元気になっていきました。時には発熱、腹痛、ケガなど色々ありましたが、全て浄霊をいただいて良くなり、小学校三年生の時に会員になりました。

また父は当初、浄霊を信じることが出来ませんでしたが、母がだんだんと元気になる姿を見続けていたことと、自分自身もソフトボールの試合中に、ランナーと激しく衝突して、軽い脳震盪を起こして体を動かすのが大変になるほどのケガをしたことがきっかけで、父も浄霊をいただくようになりました。そのおかげで仕事を休むこともなく、浄霊をいただくたびに体が楽になっていくことを実際に体験し、その後自らお願いして入会致しました。

母は「浄霊に御縁がなければ、我が家は崩壊していたと思う。だから、この感謝を絶対に忘れてはダメよ」と口癖のように言いながら、家族皆が会員になれた時の母の喜びようは今でも忘れられません。

私自身も特に大学生の時、試験中に首肩が猛烈に凝って、急に脳貧血のような状態でフラフラになり、試験後に何とか支部までたどり着きましたが、その後数時間寝込んだまま全く動けなくなってしまいました。しかし、何度も浄霊をいただきますと楽になり、おかげ様でその翌々日の試験も無事に受けることが出来、単位も取得出来た時は改めて浄霊の有難さを痛感しました。

私が通っていた大学は佐賀支部と近かったこともあり、私は授業の合間など時間のあるごとに支部へ浄霊をいただきに行っていました。支部には、心や体の悩みで苦しんでいるたくさんの人が来られていて、浄霊をいただいていくうちに徐々に楽になり、笑顔が出るようになって幸せになっていかれる姿を見て、私は「浄霊の力は、やはりすごいな…」という思いが日に日に強くなっていきました。大学で私は色々な理論を学んだり、サークル仲間と遊んだりしていて、その時は楽しいのですが、心の中ではいつも何となく物足りなさがあり、本当の「満足感」を感じることが出来ませんでした。その一方で、支部に行って浄霊をいただき、自分自身も浄霊お取次のお手伝いなどを通して、たくさんの人々が幸せになっていく姿に触れるのはとても嬉しく感じ、それが自分にとって一番楽しく充実した時間となっていきました。

「人が幸せになるお手伝いをさせていただくことが、自分にとって最高の幸せ」ということを実感するようになりました。そのうち自然と「この人救いの御用に一生携わることが出来たら、何て素晴らしいことだろう」と思うようになり、大学卒業後にお願いして奉仕者になりました。

現在、田川支部で御奉仕をさせていただいておりますが、ここでも心身共に悩み苦しんでいた方々が、浄霊をいただくことでだんだんと幸せになられ、今度はその喜びを他の人達に伝えたり、浄霊を取り次がれたりすることで更に幸せの輪が少しずつ広がっています。その感激、感動を皆さん方と共に感じられることがとても嬉しく、有難い毎日です。明主様の御守護の中で、会員さんをはじめ周囲の皆さんにも色々と支えていただいて本当に感謝ですし、いつも何か新しいことを学ばせていただいております。

難病の診断を受けるも…

また、約三年前には父が国の難病指定である「頸椎後縦靭帯骨化症」になり、首から肩にかけての激痛で手が上がらず、睡眠や食事もままならない状態になりました。この病気は医学では決定的な治療法も薬もなく、中には命を落とす方もいると聞き、私も色々なことを覚悟致しましたが、父は浄霊を毎日のようにいただくことで、現在は体の動きに不自由を感じることなく生活出来る程に快復致しました。命の継ぎ足しだけでなく、このように元気になった父の姿を見ることが出来るのも、本当に感謝しかございません。

これからも一人でも多くの方が救われて幸せになられますよう、精一杯努力させていただきたいと念願しております。

明主様、誠に有難うございます。

（福岡県田川市）

浄　霊

浄霊は大自然のエネルギーであり、病気やあらゆる問題で苦しんでいる人、悩んでいる人を救う方法です。

浄霊によって魂は清浄化され、肉体が健康になっていきます。

まずは試されてみてはいかがでしょうか。

浄霊入門⑮

（浄霊を体験したフランス人のつぶやき）

浄霊は比較できないものである。

浄霊は自然治癒をするエネルギーであり、霊的に目覚めるためのモノでもある。つまり、幸福に達するための方法であるが、まだまだ知られていない方法である。

西洋医学の薬は、風邪や下痢といった症状を抑え、みるみるうちに色々な病態をコントロールしてくれる。しかし、それは自然に行われている浄化作用を止めているだけである。

つまり、完治しているように見せかけているのだ。どういうことかというと、症状が抑えられているから、体調もすっきりしているように感じるが、体内には多くの「ゴミ」が残っている。ゴミが残れば、体は当然、またそのゴミを外に出そうとする。だから再び浄化作用が起きるのだ。要するに、薬を使うということは、やっかいなことを先送りにするだけなのだ。

ゴミ、つまり毒素は、よく使う体の部分に蓄積され、固まっていく。

肩や首、頭や目、腎臓…そういうところに集まり固まっていく。

浄霊は特殊である。それは「火素」といって、太陽の力を利用しているからだ。体内に固まっている「毒素」を溶かす力をもっているため浄化作用が可能となり、人間の体が少しずつ良くなっていく。そうしていくうちに、薬に頼らなくてもやっていける体に変わっていく。もちろん、そこは極端にならずに、自分のペースで進んでいくのがいいと思う。

例え浄霊を毎日何十回といただいても、毒素や曇りを全て取り除くことは無理に等しい。なぜならば、浄化作用は必ず来るからである。

時には浄化がつらい時もある。「これは浄化作用だから大丈夫」と思えない時もある。くじけそうな時もある。でも、そういうつらい時こそ、信仰をしっかりもたないといけないのかもしれない。

明主様が仰る病気・貧乏・争いのない世界は決して問題ゼロの世界ではないし、不老不死を求める世界でもない。地上天国というのは、人間が根本的に魂から健全になり、生きる者が平和を願うところをいうのであろう。

〈終〉

美の世界

美によって人間の情操を高め、生活を豊かにし、人生を楽しく意義あるものにすることができます。

甲斐巳八郎《砂漠の城》

砂煙のなか目を凝らすとぼんやりと浮かび上がる城の輪郭。暈された水墨の濃淡によって表された丸みのある尖塔屋根や赤みを帯びた城壁がそうした異国の情景に立つ感覚を思い起こさせます。本作は熊本生まれの画家、甲斐巳八郎がこの世を去る一年前に描いた《砂漠の城》です。

明治三十六（一九〇三）年に生まれた甲斐巳八郎は、大牟田高等小学校、有田工業学校を出たのち、京都市立専門学校（現京都市立芸術大学）に入学し日本画を学びます。その時に師事した福田平八郎は生涯にわたる師だったとされており、言われたことをずっと気にかけていたようです。卒業後は雲崗石窟調査隊への参加を経て福岡県立宗像中学の教師となりますが、二年後の昭和五（一九三〇）年には退職して再び中国へ。ほどなく満州鉄道社員会報道部に勤務し、沿線各地を旅してたくさんのルポルタージュを執筆しました。

沿線の史跡、文化、生活に関わる風物を素描と文章で伝えたルポルタージュは雑誌や新聞で連載されたほか、単著の素描集『北京』を出版することになるほど好評を博しました。また、旅行で取材したことをモチーフに絵画を制作し、大連や銀座で個展を開催したり、満州国国展に出品、受賞して買い上げになっていたりと、画家としても精力的に活動し認められていました。

戦後は宗像に引き揚げ、再興日本美術院展に出品して院友にも推挙されますが、数年のうちに出品をやめ中央の美術団体から距離をとるようになります。そして水墨画に専念し、福岡を拠点に個展中心の発表を晩年まで続け、本作からも分かるように水墨の可能性を広げた独自の画風を築きました。

甲斐にとって「旅」は、とても重要なものだったように思えます。暇さえあれば山歩きをしていたといわれる日本国内はもちろん、満州時代は旅が仕事のようなもので、さらに昭和四十七（一九七二）年のアフガニスタン旅行を皮切りに、インド、パキスタンへも向かうようになりました。アジアのルーツへの関心がそうさせていたのかもしれません。しかし何よりも、ひとり観念的であることを排し、自分の目で新しいものを見、体験した空気を伝えようとする信念が制作の軸にあったからではないでしょうか。

解説　松田愛子

晴明会館

「背景に九州」前期展

期間：6月1日（火）～12月11日（土）

※晴明会館お問い合わせ☎（092）661－1535

健康新聞についてのお問い合わせは（092）661－1531まで